

1 か月健診で多い質問について

当院では、当院で出生したお子さんの1 か月健診を毎週火曜日午後に行っております。

1 か月健診は、疾患の有無や体重の増加を確認するとともに、養育上の問題点を相談、解決する場です。気になることは何でも相談していただいて、解決していただければと考えています。以下は、多くの方が同じように悩まれる、1 か月健診で聞かれることの多い質問です。不安に思っていたことの解消になれば幸いです。

●うなる

赤ちゃんが顔を真っ赤にしてうなることがあります。苦しそうにしている、便が出せないのではないかと心配される方もいらっしゃいますが、うなる行為には病的な意義はなく、成長とともに見られなくなってくるので、特に心配はいりません。

●便の回数

この時期の赤ちゃんの便の回数は個人差が大きく、飲むたびに出る子から 2-3 日に 1 回の子もいます。便の回数の問題のみで、何かの異常であることはありません。便の回数が少なく、体重が増えない、嘔吐が頻回、おなかが張っているなどの他の症状伴っている場合は、病的な便秘の場合がありますので、レントゲン検査などで評価をします。

●乳児湿疹

生後 2-3 か月くらいまでの赤ちゃんは、お母さんのホルモンの影響を受けて、皮膚の脂の分泌が多いと言われていています。この時期の湿疹の原因のほとんどは、これによるもので、乳児湿疹と言います。治療の中心はスキンケアで、泡立てたボディーソープでよく脂分を落とし、きれいにシャワーで洗い流すようにしてあげましょう。

●鼻閉

赤ちゃんの鼻のつくりは未熟で、特にかぜを引いたりしていなくても、鼻が詰まったようにズコズコと音がすることがしばしばあります。よく哺乳ができて眠れていれば問題はなく、体格が大きくなるにつれて改善されます。

●赤あざ

皮膚の一部赤く見えるものはいわゆる“赤あざ”と呼ばれるもので、医学的には血管腫といいます。目の周りやおでこ、首の後ろなどに良くみられる、平面で隆起のないものは単純性血管腫といい、美容的な問題のみであることが多く、ほとんどのものは治療の必要性のないものです。しかし、**乳児血管腫**と呼ばれる一部の血管腫に関しては、近年、内服薬での治療ができるようになり、当院でも治療を行っています。気になる方はご相談ください。

●おへそ

おへそが膨らんで見える、いわゆる“でべそ”であることがあります。医学的には臍ヘルニアといい、これまでは、ほとんどは自然治癒するために、経過観察することが多かったものですが、一部は残ってしまったり、皮膚の余りが目立つことがあるため、当院では圧迫療法という治療を行っています。気になる方はご相談ください。

早産児について

在胎週数 37 週～41 週で生まれた児を正期産といますが、それより早く生まれた児を早産といます。早産で生まれた場合、生まれてすぐは呼吸が速く努力様であったり、哺乳が十分できなかつたりすることがあり、その場合当院では、NICU、GCU といった専門の設備で集中的な治療と看護を行うことができます。当院では 32 週以降の早産児を対象としており、急性期を乗り越えた赤ちゃんの多くは十分哺乳できるようになり、酸素なども必要なく、十分な体重と週数になって退院します。

退院後は発達や合併症の評価を外来で行います。この時期は発育が盛んなので、血液や骨を作ることが十分に追いつかないことで、貧血になりやすかったり、骨がもろくなりやすかったりすることがあるため、採血やレントゲンなどの評価を行い、そのような徴候がみられる場合は内服薬治療を行います。ほとんどは一時的な治療で、十分な発達を確認して外来受診を終了します。

また、35 週以下で出生した児は、RS ウィルスというウィルス（風邪の原因となる代表的なウィルス）に感染した場合、肺炎などの呼吸器の重症感染症を起こすリスクが高く、それを予防するために、シナジスというお薬の注射を行うことができます。

早産となるケースのほとんどは、予定より早い出産の場面が突然生じるため、ご家族は不安や心配を抱えていることが多いかと思われます。赤ちゃんも一人一人抱える問題点は異なりますので、赤ちゃんのご家族に寄り添った医療を提供できるように常に心がけていきたいと考えています。